

して比較してみる。

才二表をみると、卷四はあきらかに他の卷とは違つてゐる。「矣」は全然例がなく「焉」もたゞ一例のみである。しかし「也」字になると三八例も用いられ、全体からみた場合四番目に多く用いられている。卷六、十などは多少の差はあるが、他の卷に比べてそれらの文字を最もよく用いている卷である。又卷三十は「之」「也」「矣」は他の卷に比べて少く用いているが「焉」はかなり用いていることになる。このようなことから書紀の編纂者が、それらの能力に應じて個性を發揮しながら仕事を進めていつたであらうことがうかゞえる。

又各卷の用例を用法の種類の上からみても各卷の特徴が出てゐる。卷一、二などは複雑な用法がなされてゐること「是年也云々」の例が見えないなど共通点があり、卷九、一九なども、これらに次いで複雑である。逆にどの品詞に接続した場合でも国語の断定の用法と通じる用法だけしか用いていない卷がかなりあり、中でも卷四は才一才二の用例だけで著しく他の卷と異なつてゐる。

こうして各卷の特徴を把握し他の卷と比較し類似点や相違点を見出していけば、それによつて卷々の編纂者を推定することも不可能ではないと思われる。もつと詳細に考察を試み他の同じような漢文的用字例についても調べれば、もつとはつきりしたことがいえよう。

「夏目漱石のユーモアについて」

Ⅱ子規宛書簡集を通じてみたる

ユーモアと子規との交友Ⅱ

淵 上 陽 子

(一)

漱石は「文学評論」のなかで、笑いにおけるユーモア・ウイット・パンの区別を論じてゐる。「ヒューモアとは人格の根底から生ずる可笑味であるといふ事になりはせぬかと思ふ。外の言葉で云ふと、ヒューモアのある人の行為は他から見ると可笑しいが、本人自身では他から可笑しがられる訳はないと思つてゐる。彼は真面目である。無意識に可笑味を演じつゝある。もう一つ云ひ直すと、可笑味が当人の天性、持つて生れた生地から出る。従つて取つて付けた様に見えない。行雲流水の如く自然である。之に反してもし人を笑はせると云ふ結果を豫期して可笑味を演ずるならば、其人は如何に巧妙に道化しても、道化を自覚しつゝ遣つてゐる。意識して、尋常にはずれた行為言語を弄するならば、其行為言動は故意である。即ち不自然である。仮り物である。内から湧いたのではない。外から引つ付けたのである。私の解釈によると是がキツトである。」^(ヒューモアのことか)として、ユーモアはウイットよりも本来の人間性、自然の人間味を

持つものとし、パンすなわち駄洒落は「固より文学的に価値の多いものではない」として、低級な笑いに属することを書いてゐる。滑稽的要素、すなわち笑いの中のユーモア・ウイット・パンということが、漱石を万人のものとし、永遠のものにしているのではないか。もちろん漱石の文学の真髓が滑稽的要素にあるというのではない。むしろそれは異つた鋭さで、人生の暗さ、人間の苦惱を真摯に取り扱つた文学は、強く心を魅きつける。漱石には、笑いと暗さといふこと、この二つの面が存在し、「己れの心の複雑さと聰明にもてあました」^{註1}のである。芸術家漱石でなく、人間漱石の魅力を、ユーモアという面から書簡集を通じて考へてみたいと思う。今日の漱石あらしむに大きな影響を持つた子規宛の書簡を通じて漱石のユーモアと子規との交友をみたいと思う。

(一)

書面とユーモア

(1) 才一期、才一高等中学校本科時代

子規に十一通書いてゐるが、ユーモアを含んでいない手紙は一通も書き送つていない。全部を通じて感じられることは、書く本人の漱石自身も面白がり、自然と興が湧き、その興がつきず、夢中になつて書き送りその返事に感じ入つては、又書くという状態だつたと思われる。書くということ、自分の心の中を打ちあけ、それにこたえてくれる子

規に対し自分の心情を吐露せずにはいられなかつたのである。明治歌壇最大の偉勳者である子規と漱石の若い頃の事である。いかに二人が相手が必要とし、感受性の強い鈍い心をもつて感じ入り、相手に自分の心を残らず理解してもらうことは、どんなに大きな青春の喜びであつたことか。漱石の場合にはそのことごとくがユーモアという形をとつて吐き出されたといつてよい。いい変えれば、真面目くさつた言い方よりも、ユーモアの中が言いやすかつたのである。明治二十二年九月二十七日の書簡は、やりとりしている当人ならずとも、十分面白く、戯作者めいた書き方である。「點數一条」の事を頼んだ子規を令嬢、妾に仕立て、頼まれた自分を郎君に仕立てて、その令嬢に「あらまあほんとうに頼もしい事、ひよつとこの金さんは顔に似合はない実のある人だよ」と女の言葉までつかわせている。艶のある、なまめかしい物語めいた書簡である。「御散財をも顧み給はず……御震翰下し賜はる段御親切……奉るならん……御注進仕るは……御覧じろ……」と自分に敬語をつけて丁寧語なる「御」を連発しておかしさを出してゐるのである。必要以上の敬語、故意に誤つた敬語の使い方がユーモアを感じさせる。「先頃手紙を以て依頼されたる點數一条おつと承知皆迄云ひ給ふな萬事拙の六寸にありやす先づ江戸つ子の為す所を御覧じろ……引き下りやす……為め得ず」等の江戸つ子言葉、言葉だけではなく江戸下町の

やくざ的氣質に端を發したような「掛がへさへあれば命の二つ三つは進呈仕り」という言葉の中に、漱石の義理がたさ、情の深さといつたものがユーモラスに表われている。事実漱石は馬鹿正直なくらい正直で、義理人情が厚かつたのである。「坊ちゃん」は明治三十九年、漱石四十歳の時書かれたものだが、その坊ちゃんが、江戸つ子のウィットさ、粋のいい江戸弁を使って明快な滑稽味を出すのに成功しているのは、漱石にしてみれば自分の言葉をそのまま用いたに過ぎないのである。漱石は江戸つ子弁を愛していたのである。江戸つ子弁の持つ粋のいいたんか、人の良い一途さ軽さ等が、漱石の氣持を表現するのにぴつたりした時期があつたのである。漱石のユーモアが、警句皮肉等を内包してゐるのは、單なる滑稽さだけでなく、漱石の内部にはきらりと光る批評の精神があつたからである。漱石のユーモアは單なる笑いではなく、そのニュアンスは複雑なのである。一語一語は滑稽なのだが、全体から受ける感じは、素直な笑いではない。それを理解したればこそ、二人は夢中だつたのである。落語、講談を二人は愛していた。二人が知り合いになつた動機は寄席のことだと漱石は言つてゐる。又、漢学の趣味もあつた。「勘考仕れば前後の分別もなく無茶苦茶に六ツカ敷漢語を行列したるは」等、一般に漢文調、漢語は、理屈っぽい正式ばつた感じを与えるものだが、漱石はその性質をそのまま認して、真面目くさつ

た中に、かえつてユーモアを出している。真面目、正式ばつた性質故にかえつておかしきを持つのである。ユーモアな表現に満ちていても、自分の言いたい事ははつきりといつてゐる。漱石のユーモアは單なる言葉の面白さのみでなく、いつも意味内容を持ち、筋が通つてゐる。すべてお互を認めあい、感激しあい、同調しあつてゐた二人にも明治二十二年十二月三十一日の書簡あたりから、自我が、個性が、頭をもたげてきて、ユーモアもおのずとその内容を異にする様になる。ユーモアのなかに真剣さが増すのである。

(2)才二期、帝国文科大学時代

「阿々先づ夜中の景は……自炊の竈に顔を焦し、寄宿舎の米に胃病を起しあるひは下宿屋の二階にて飲食の決闘を試みたり。」「さすが詩神に乗り移られたと威張られる御手際……天晴れ／＼かつぼれ／＼」等、漱石が、パン、駄洒落として文學的価値はないとしたものに属する様な冗談、輕口、講談口調、落語口調も多く出ているが、又技巧も見られる。明治二十四年七月九日の書簡、「烈しかれとは祈らぬ」は千載集にある源俊賴の歌「憂かりける人を初瀬の山嵐烈しかれとは祈らぬものを」と古歌を引いたり、「……南風に車天さな怒り給ひそ」と古文調を使い、「ほろふくるゝの道理ぞかし」と徒然草の「おぼしき事言はぬは腹ふくるゝわざ」をもじつたり、「説論」を生かして使つてい

る。「東耳南風」は「馬耳東風」をもじつたものである。^{註2}

こんな所に漱石が戯作者だといわれるのかも知れない。漱石は技巧家であつた。遊戯的でもあつた。しかし遊戯的といつても、少なくとも子規宛て書簡においては、それは表現上のみであつた。「単に壮言大語僕を驚かせしなれば僕向後決して君を信ずまじ又冗談ならば真面目の手紙の返事にかゝる冗談は癡して貰はんと存ず」(明24・11・7)と書き送つてゐることからもわかる。滑稽とおどけを、悪口と冷評とに區別し、漱石にとつては滑稽、おどけとは善意をもつた愛すべきものだつたのである。その滑稽な言葉、表現を用いて、文学を語り、哲学を語り、人生をも語つてゐる。しかし、二人には同調、賛同ばかりあつたのではない。「あの時君と僕の嗜好は是程違ふやと驚き候位然し退いて考ふれば是前にも云へる如く元來の嗜好は同じきも從來学問の行き掛りにてかゝる場合に立ち到り候」(明24・8・3)をみてわかる。ユーモアを含む余裕もないほど真摯に自己を主張し、自己を貫こうとする二人ではあつても、それは相手を尊敬する上にたつての反目であつたのである。反目というより、信念の相違なのであつた。

(3) 帝国大学卒業後

この期は、漱石は明治二十六年七月大学を卒業し、高等師範につとめたが、明治二十八年四月愛媛県尋常中学校教師となつて松山に行き、翌年四月には才五高等学校に転任

し、六月鏡子と結婚、明治三十三年にはイギリスに留学する、大きな岐路を経る時期である。一方子規は、「日本新聞」に入社して、文章や俳句を発表して、俳人としての文名は知られたが、明治二十九年、三十歳の時、歩行の自由を失ひ病牀に呻吟しながらも俳壇に活躍し、「ホトトギス」を発刊したが、明治三十五年九月十九日、漱石が留学中三十六歳の生涯を閉じたのである。「酒囊飯袋を荷ひてのそく」と帰京仕候——落付かぬ尻に帆を挙げて」とか、漱石特有のユーモアな表現もあるが、全体として、中学時代、大学時代に比べて、ユーモアな表現は少なくなつてゐる。今までの様に滑稽な表現でも言つて笑つてみたいと思つても、心の苦惱が、滑稽な表現では満たされなほほど深くなり、又お互いを自分の半身と思えないほど、二人の心には自分の心というものがあつた年令に達したからであらう。

(三)

漱石の書簡で一番古いのは、明治二十二年五月十五日、子規宛てに書かれたものである。それを初めとして明治二十二年から明治二十五年迄の四年間はすべて子規に宛てられたものである。次表のごとく明治二十六年からは、狩野享吉、齋藤阿貝、西谷虎二と漱石の手紙の相手は段々多くなつていくが、しかし、子規が明治三十五年九月十九日亡くなる迄の八年間は、全書簡数一七七であるが、その中の約三分の一の五五通を子規宛に書いている。次は狩野享吉

	全 書 数	正岡子規 宛 書 簡		そ の 他			
明22	7	7					
23	6	6					
24	9	9					
25	5	5					
26	5	2	狩野 1 享吉 1	齋藤 1 阿貝 1	西谷虎 2 二 1		
27	10	4	3	0	菊池 2 謙二郎 2	大塚 1 保二 2	
28	16	7	4	2	2	0	近藤林内 1
29	22	6	7	1	0	1	横地 2 石太郎 2 坪内確藏 1 玉蟲一郎 1 水落義一 1 藤井二男 1
30	18	6	5	1	1		1 赤木通弘 3 村上半太郎 1
31	10	0	4	2			土屋忠治 1 菅 虎 二 1 前田 1 浦生 榮 1
32	15	0	11	1			土屋忠治 2 夏目直矩 1
33	18	0	5	1	夏目 5 鏡 5	藤代 2 祝輔 2	中根 1 寺田 1 重一 1 寅彦 1 村上半太郎 1 松本源太郎 1 齋藤阿貝 1
34	21	3	1 連	1	9	3	2 夏目直矩 1 芳賀矢一 1
35	15	0	0	1	8	1	1 渡辺伝右衛門 1 永屋冒雄 1 村上半太郎 1 菅 虎 雄 1
計	177	55	41		夏目鏡 22 高浜清 8		齋藤阿貝 4

の四一通、夏目鏡子の二三通である。鏡子宛てのは特別として、子規と狩野草吉宛ての書簡を比較してみると、漱石らしい「ある大変な Vanity の強い女」（明34・2・9）に対する漱石の鬱憤を皮肉なユーモアのなかに表わしているが、子規宛書簡に比べて内面の心をユーモアのなかに告白したのではなく、報告めいた、客観的に漱石の心を表わしたものに過ぎない様に思われる。主観的に、感情的に溺れ、夢中になつて書き送つたものではなく、どこかに相手に対する節度が保たれている様に思う。礼儀正しさが抜け切らないのである。ユーモアを含んでいない他の書簡にも一種の礼儀正しさ、いわゆる普通の書簡に見える事務的な感じのものが多し。時期も最も早いのが大学院時代からのもので、漱石は子規にも余り滑稽味あふれた手紙は書きおたくつてはいないが、子規のとは性質を異にする様に思う。子規宛てのものは、ユーモアこそ少くなつてはいるが真情あふれた書簡なのである。返事を期待してゐるのである。狩野草吉と正岡子規とが漱石にとつて性質の異なつた友であつたのがわかる。子規の場合は漱石にとつて心が踊らずにはいられない、何事においても驚嘆すべき存在だつたのである。尤一に、誰にも理解してもらえないと思つていた自分の心を理解し、その心に容れてくれ、またそれよりも時には深くしてかえしてくれる子規に対する驚き、自分が思う事を又相手も考えているということを知るといふ喜び、

喜びにしろ、悲しみにしろ、憤りにしろ、心の中からそのまま、思つた事を吐き出したとしても曲解されることのない相手を見つけた喜び、自分の考えもしない深遠なものが相手にあるということを知る事、これは子規、漱石ならずとも驚喜せすにはいられないだろう。それがユーモアな表現をさせたものと思われる。中学時代、大学時代に、戯作風に洒落めかし、義太夫口調を、或は寄席の言葉を使つたりして、漱石の持つあらゆる力を注いで、滑稽味あふれた手紙を書いたという事は、子規によつて初めて心の中を表現する喜び、文章を書くという喜びを知つて、自分の心の中を冷静に、客観的に書くことが出来なかつたのである。この喜びを感じたのは漱石ばかりでなかつた事は子規の明治二十三年七月十五日の書簡をみてわかる。

「此頃はめつきりあつく相成毎日／＼伍右衛門なかせといふお天気とハちと贅沢な話にてたとひ僕等の如き病身の一ツや二ツをあつさのために犠牲に供しても百萬の蒼生を餓鬼道より救ひたいとの熱心……（略）：松山 花風病夫より漱石大先生」此期の二人は、自分の思いをユーモアにたくして表現する事がたまらない魅力だつたのである。右の子規の書簡にも「松山 花風病夫より漱石大先生」として、最後の宛名、署名までも本文のユーモアを残しているが、漱石の場合、子規宛書簡をみてみると次表の通りである。明治二十二年には、「菊井町のなまけ者」、「妾へー郎君よ

年	宛 名	署 名	そ の 他
明治二十二年	丈 鬼 様 丈鬼兄座右 妾へ 四国仙人悟下	菊井の里漱石 より 菊井町のなま け者 郎君より 埋塵道人拜	正岡大人——金之助 子規御前——漱石
明治二十三年	正 岡 詞 兄	露 地 白 牛	子規病牀下一漱石 子規机下一漱石拜
明治二十四年	偷 花 児 殿 物草次郎様 こまだれの中 物草次郎殿 のぼるさま もの草次郎殿 子 規 臥 禪 傍	平 凸 凹 平 凸 凹 凸 凹 平凸凹拜 平 凸 凹 平凸凹乱筆	正岡常規さま一金之助 常 規 殿一金之助
明治二十五年	獺祭詞兄尊下 子規さま尊下	平凸凹より 平 凸 凹	子規さま一金之助
明治二十七年			子規一金之助 梧下正岡賢契座下一金之助 // 一夏目金之助
明治二十八年	兩待様御枕元	愚 陀 仏	升様御もと一金 (2)
明治二十九年	子 規 様	愚 陀 仏	子規様一漱石 研水原
明治三十年	升 様 子規庵御もと	金表側口 愚 陀 仏	子 規 様 一 漱 石 薬湯炉辺 升 様 一 金 子 規 様 一 漱 石 子 規 君 一 漱 石

り」「埋塵道」とあり、二十三年には「露地白牛」と自称し、二十四年になると、「物草次郎様」と物草太郎をもじつたものを三つ用いて呼び、幼時病んだ痘瘡の跡が残つていたのを戯称して「平凸凹（たいらのでこぼこ）」と自称したものを六つ用いている。明治二十五年「平凸凹」を二つ、二十八年、二十九年、三十年には愚陀仏を各一つずつ用いている。後年になるとこうしたものもが少なくなつてゆき、子規様、升様という正式の表記になつていくのは、ユーモアのある書簡が少くなつて行つたのと関連がある。漱石は多くの人に書いたが、数だけに限らず内面を書き送つたのも、つまり量、質ともに子規が一番なのである。子規との交友は「大兄の御考へで小生が悪いと思ふ事あらば遠慮なく指摘して呉玉へ。是交友の道なり。諷刺嘲罵は小生の尤癪にさはる処短刀直人の説法なら喜んで受納可致候」（明28・12・18）に言つてるように諷刺嘲罵という間接的な非難をし合う相手ではなく、単刀直入に是は是、非は非とする間柄だった。明治三十一年、三十二年、三十三年には、子規に一通も書き送つていないのは、「子規近來の模様如何此方より手紙を出しても一向返事もよこさず多忙か病氣か」（明29・12・5、高浜清宛）とある様に、子規が仕事や病気で手紙を書かなくなつたのであろう。漱石の方は、子規の書簡を心待ちにしていた様子が見える。又漱石も子規も、年令的にも、自分の心、生活というものが、

二人の関係よりも比重を持つ様になつたのである。しかし若い頃に心を打ち明けあつた心には、いつまでも若い日の思い出が鮮明なものである。子規が亡くなる前年、明治三十四年十一月六日、「僕ハモイダメニナツテシマツタ。毎日訳モナク号泣シテ居ルヤウナ次才ダ。ソレダカラ新聞雜誌ヘモ少シモ書カヌ。手紙ハ一切廢止。ソレダカラ御無沙汰シテスママ……」と哀切として胸につまる、訴えの手紙を書いている。漱石に自分の苦しみを聞いてほしかつたのである。二人の心には、若い日からの心のふれあいが脈々として続いていた事を物語ると思う。（昭和三十二年版漱石全集 岩波書店 に用例は従いました。）

註1 臨時増刊 文芸 夏目漱石読本 漱石の青春 中村光夫（昭29、9、20）
註2 漱石全集才二十七卷（昭32、6、27）書簡集1 注 解 小宮豊隆

参考文献

- 1、猪野謙三 講座岩波日本文学史 漱石
- 2、漱石全集月報 才二号、才八号、才十六号
- 3、夏目鏡子「漱石の思ひ出」（昭34、4、5）角川文庫
- 4、湯地孝「漱石戯作者論覚書」（昭7、4、国語と国文学）
- 5、小宮豊隆「夏目漱石」（昭22、1、25）岩波書店
- 6、正宗白鳥「作家論」新潮社

- 7、日夏耿之介「明治大正の小説家」角川文庫
- 8、本多顯彰「夏目漱石論」英宝社
- 9、伊藤整編「夏目漱石研究」新潮社
- 10、松岡讓「漱石先生」岩波書店
- 11、伊藤整編「夏目漱石」近代文学鑑賞講座 角川書店
- 12、小林一郎「夏目漱石の書簡研究」国語と国文学
- 13、寺田寅彦「夏目漱石先生の思い出」筑摩
- 14、森田草平「夏目漱石」甲島書林
- 15、田村專一郎「漱石の早期作品に見えたる二傾向」国語と国文学

- 16、山本正秀「夏目漱石の文章」国語と国文学
- 17、藤川忠治「子規と漱石」国語と国文学
- 18、岩永胖、現代文学総説1 学燈社
- 19、小宮豊隆「漱石、寅彦、三重吉」角川書店

「方丈記」の構想と

その中心思想

江崎 鈴子

中世の無常の文学として知られている「方丈記」は、すでに多くの研究がなされているが、その特色として、「方丈記」は「自らの態度に不徹底を認め矛盾を恥じた告白を

したものである」(註一)とされる永積安明氏の消極説と、「無常の世をいかに生くべきかを身を以つて追求した人生記録である」(註二)といわれる西尾実氏の積極説がある。一つの文学作品に対しておかざる見解の相違をみることは、その中に盛られている思想のとらえ方によつて生ずるものである。そこで私は、作品研究の根本的な段階である作品自体の分析、即ち、どういふ素材でいかなる表現をしているかによつて、その構想を明らかにし、それを契機として「方丈記」の主題をつかみ、その中心思想を究明したいと思ふ。

「方丈記」に流れている思想を考察するためには、「方丈記」を研究することによつてのみ解決できるものではなく、作者鴨長明の他の作品の研究、又は長明の作家研究、更に、当時の社会情勢など、その他あらゆる方面からの研究が必要であることは明らかであるが、ここでは主として「方丈記」そのものについてだけみることにする。

「方丈記」の思想を探究して行くに当つて、長明の生きた当時の世相、生い立ちについて簡単に触れてみる。

長明は平安時代の末期、一一五三年に生まれた。藤原氏の勢力が傾いて保元の乱、平治の乱と相次いで戦乱が起り、世はまさに動乱の危機にあつた。人々は諸行無常を感じ、厭離穢土・欣求浄土の觀念から、厭世的風潮が高まつた。かかる世相に起つた安元の大火、治承の大つむじ風、